

# 虹ヶ咲学園スクールアイドル同好会のヤンデレ日常

裕ちゃん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

こんにちは。今回虹学のメンバーでヤンデレものを書きたくなり、今回の小説を投稿することになりました。今回は主人公をスクスタの「あなた」にし、さらに性別を男に変えて書くことにしました。ヤンデレメンバーたちの重い愛を主人公はどう受け止めていくのか？またそれぞれの愛の形とは一体どんなものか？というものを書いていきたいと思います。

目次

歩夢編	その1	1
歩夢編	その2	7
歩夢×せつ菜×あなた(女)	その1	15
ヤンデレ彼方ちゃん		23

## 歩夢編 その1

歩夢「あなた、起きて？遅刻しちゃうよ？」

裕「うーん……あと5分……」

歩夢「もう！早く起きないと卵焼き作ってあげないよ？」

裕「それは……困るっ!!」ガバッ

歩夢「きゃあ！急に飛び起きたらびっくりしちゃうよ！」

裕「はは、ごめんごめん」ナデナデ

歩夢「もう……しょうがないんだから／＼」

歩夢「じゃあ卵焼き作っておくから、顔洗ってきてね？」

裕「わかった。」

裕「あむっ……うん、相変わらず歩夢の卵焼きは最高だ！」

歩夢「ふふっ、嬉しいな。」

裕「毎日食べたいくらい！……と言っても毎日食べてるんだけどな。」

歩夢「高校生になってから毎日作ってるもんね。」

裕「いつもありがとうな。迷惑なら毎日こなくていいんだぞ？」

歩夢「ううん、私がしたいからしてるだけだよ。」

歩夢「私は、あなたの笑顔が見ればそれ以外何もいらなから。」

裕「……そっか。」

歩夢「あ、見てもうこんな時間！早く食べて学校いこ？」

――

裕「ふあく……歩夢の飯はめちゃうちや美味いけど食った後にすぐ眠たくなるのは難点だな……」

歩夢「だってあなたのためだけを思っ作ってるんだよ？私の愛をたっぷり込めて……」

裕「だからあんなに美味しいのか！母さんより余裕で美味しいもん  
な」ナデナデ

歩夢「も、もうっ／＼褒めすぎだよ？」

かすみ「裕先輩！歩夢先輩〜！」

裕「おっ！かすみちゃんおはよう！」

歩夢「……おはよう、かすみちゃん。」

かすみ「おはようございますっ！どうですか裕先輩！今日のかすみも可愛いですか？♡」

裕「あー、うん、世界一可愛いよ。」

かすみ「相変わらず適当な返事ですね……もうっ、裕先輩なんて知りません！」

裕「ははっ、ごめんごめん」ナデナデ

かすみ「あっ……もう、髪型崩れちゃいます……／＼」

歩夢「……」ジーツ

裕「！」

裕「あっ、かすみちゃんも歩夢もそろそろ行こっか！」バツ

かすみ「あっ……」シユン

歩夢「……そうだね、遅れたらまた生活指導の先生に怒られちゃうもんね」クスクス

キーンコーンカーンコーン

裕「やつと昼休みだあ…… 疲れた」

歩夢「ふふっ、あなた頑張ってたね。お昼ご飯食べよっか？」

裕「そうだな、その前にちよつとトイレ……」

愛「ぶちよー!」

裕「愛ちゃん!どうしたの?」

愛「昨日はお店来てくれてありがとね!ちよー楽しかったよ!」

裕「こちらこそもんじやご馳走さま!めっちゃ美味しかったよ!」

愛「でしょー!愛さん特製の愛がたっぷりもんじやだからね!」

愛「そうだ!今日もおいでよ!今日もたくさんサービスするから……」

歩夢「ごめんね。」

歩夢「今日は2人で夜ご飯を食べに行くんだ。」

裕「え?そうだっ……」

歩夢「ね？あなた。」

裕「！」

裕「そ、そうなんだ！」

愛「そうなの？それじゃ歩夢と一緒にどうせならウチのお店来なよ！サービスたくさんしちゃうよ？」

歩夢「ごめんね、もう違うお店予約しちゃってるから……」

愛「そっかー、残念！」

歩夢「また今度『裕くんと二人で』愛ちゃんのお店に行つて良いかな？」

愛「もちろん！大歓迎だよ！」

歩夢「ありがとう、愛ちゃん」ニコツ



裕「……」

男子トイレ

裕「ふう……」

最近、歩夢の様子が変だ。特に同好会ができてから……

あの生氣のない目……以前なら歩夢はあんな目をしなかった。

それ以外は変わった様子はないんだけどな。

ピロリン♪

裕「あ、メールだ……かすみちゃんから」

〔裕先輩、今日の夜大事なお話があるので電話できませんか？〕

## 歩夢編 その2

その日の夜

prrr

裕「もしもし？かすみちゃん？」

かすみ「あ、先輩！夜遅くにごめんなさい……」

裕「いいよいいよ。どうしたの？」

かすみ「あの……」

かすみ「先輩のことがっ……好きです！私と付き合ってください！」

裕「……へ？」

かすみ「本当は、電話じゃなくて面と向かって言いたかったんですけど……最近ずっと先輩の隣には歩夢さんがいてなかなか2人きりになれないから……」

裕「あ……そ、そっか。」

裕「少し、考えさせてもらっていいかな？」

かすみ「わ……わかりました。返事、待ってますね！」

プツッ

裕「…：… うーん。びっくりしたなあ。まさかかすみちゃんから告白されるなんて…：…」

あの小悪魔な性格から、俺のことをずっとからかっているだけなのか  
と思ったけど…：…

まさか本当に好きって言われるなんて…：…

裕「カップルかあ…：…」

あれこれ考えるうちに、もう1時間ほど経っていた。  
ピンポーン

ガチャ

歩夢「あ…：… いきなりごめんね。もうご飯食べたかな？」

裕「い、いや、食べてないけど…：… なんで？」

歩夢「あなたのお母さんからね、連絡が来て…：… 今日家は家をあけるから良ければあなたに夕ご飯作ってあげてくれないかって…：…」

裕「そ、そうなんだ！わざわざありがとう！まだ食べてないから超嬉しいよ！上がって上がって！」

歩夢「うんっ♪ お邪魔します。」

歩夢「おいしい?」

裕「うん、いつも通り美味しい!」

歩夢「良かったあ… このおかずも食べてみて!自信作なの。」

裕「もぐもぐ… うん、このおかずも美味しい!歩夢の作るご飯はなんでも美味しいな!」

歩夢「も、もう… / /」

どうしよう、歩夢にかすみちゃんから告白されたことを伝えるべきか…

裕「はあ…」

歩夢「どうしたの?もしかして、美味しくない…?」

裕「い、いや!そんなことないよ!めちゃくちゃ美味しいよ!」

歩夢「なら、なんでため息をついたの?何か悩み事があるなら私で良ければ力になるよ?」

裕「いや、でも…」

そう言うと歩夢は席を立ち、俺のことをギュツと抱きしめてくれた。

歩夢「私は、あなたにずっと笑顔で居てしいの。だからそんな顔してちや嫌なの。」

歩夢「ね？だから話してほしいな。」ニコッ

歩夢の温かい微笑みと優しさに触れ、心が溶けていくような感覚だった。歩夢は昔からずっと俺の味方でいてくれたんだ。

裕「ありがとう、歩夢。実は俺、かすみちゃんに告白されちゃってさ……返事、どうしたらいいのかなってずっと悩んで……」

歩夢に抱き寄せられながら下を見ていた俺は、上を向きながらその事実を伝えた。

しかしそこには、「あの目」をした歩夢が俺のことをじつと見ていた。

歩夢「なにそれ？」

歩夢「そんなの絶対ダメだよ。」

驚くほど冷たい声で歩夢はそう言った。

裕「な、なんで……？絶対ダメってどういうことだよ！」

歩夢「だって……」

歩夢「裕くんの彼女は私だよ？」

歩夢 「私たち、『結婚を前提にお付き合い』してるんだよ？」

裕 「え……は？」

歩夢 「誰よりもあなたのそばにいて」

歩夢 「誰よりもあなたに尽くして」

歩夢 「誰よりもあなたのことを考えて」

歩夢 「誰よりもあなたのことを好きなのに」

歩夢 「それなのにあなたはかすみちゃんを選ぶの？」

歩夢 「私を捨てるの？」

しばらくの間、俺は言葉が出なかった。

しばらく、というのも大袈裟で多分1分程だったんだろう。

しかしその目で見つめられていると1分が永遠に思えるほど俺の中の時間が凍結してしまっている。

裕 「あ、いや……その……もちろん歩夢のことは大好き、なんだけど……」

裕 「その、恋愛の好きとかは俺自身はまだよく分かってない……のかな。」

必死に絞り出した答えがこれだった。ずっと一緒にいる幼馴染の想いに対する答えがこれとは我ながら少し情けない。

そういうと歩夢の表情は冷めたものからさっきのように暖かい表情になり

歩夢「やっと、あなたに好きって言ってもらえた…」

歩夢「私、今世界で1番幸せだよ」

そう言っただけで顔が赤くなる歩夢を見て思わず俺も改めてその綺麗な顔に思わず赤面してしまう。

歩夢「んっ…」

裕「!？」

歩夢「えへへ…キス、しちゃったね…これで私たち、ついにカッブルになれたね」

裕「え、か、カッブル？それはまだ早いんじゃないか…」

歩夢「なんで？」

歩夢「大好きって言ってくれたのに…？」

裕「いや、それはそういう意味じゃなくて…」





歩夢「もう嘘つかないって約束してくれる？」

裕「も、もちろん！」

歩夢「嘘ついたら」

歩夢「はりせんぼんのーます…：… だよ？♡」

裕「あ、ああ…：…。」

歩夢「大好きだよ、裕くん♡」

もう俺は、この子から逃げられないと直感した。

## 歩夢×せつ菜×あなた（女） その1

一ヶ月前

双葉「せつ菜ちゃん？もうそろそろ部室閉めるよ？」

せつ菜「あ、ごめんなさい！すぐ片付けしますね…… あっ！」バ

サツ

双葉「ん？これは……」

せつ菜「そ、それは見ないでください!!」

双葉「これはもしや…… リ〇口のラノベ？」

せつ菜「し、知ってるんですか？」

双葉「もちろん！これ凄く面白いよね！私も大好きなんだ！」

せつ菜「ほ、本当ですか!？」

双葉「うん！もつと早く言ってくれたら良かったのに！私はエミリアが好きなんだ。」

せつ菜「私もエミリアちゃんが大好きなんです！王道ヒロインって感じですよ！三巻は読みましたか!？あの展開は最高でしたね！特に主人公がエミリアちゃんを救おうと自ら死に戻りをえら…… あ、ご、ごめんなさい！私また夢中になっちゃって……」

せつ菜「私、好きなことを話し出すと伝えたいことや共感して欲しいことがいっぱいありすぎてつい話しすぎちゃうんですよ……」

せつ菜「気をつけてはいるんですけど、本当にごめんなさい。気持ち悪かったですよね……?」

双葉「そんなことない！大好きなことをせつ菜ちゃんの顔、とつても輝いてたよ！」

双葉「私もラノベとかアニメとか大好きなんだよ！でも歩夢とかはこういうの興味ないし、周りの友達にもあまりいなかったから」

双葉「良かったら、せつ菜ちゃんともつとアニメの話とかラノベの話、したいな！」ニコッ

せつ菜「わ、私も!…… 親がこういうのを禁止していて、誰とも話

したことがなかったんです。」

せつ菜「だから… 私も双葉さんと好きなことについてたくさん… お話したいです!」

双葉「よしてきた! それじゃあこれからたくさん話そう!」

せつ菜「はい!」ニコツ

一ヶ月後、生徒会室

コンコン

双葉「失礼します。同好会の件でお話があるので来ました。」

せつ菜「あ、双葉さん!」パアツ

双葉「今は生徒会長の中川さんでしょ?」

せつ菜「誰もいないんで良いじゃないですか! それで話つて?」

双葉「ほら、前も話してた同好会の予算の話なんだけどこんな感じ  
でいいかな?」

せつ菜「ふむふむ… はい、これなら通ると思いますよ。」

双葉「そっか、良かったあ… とりあえず仕事が一つ片付いたよ。」

せつ菜「いつも私たちのサポートありがとうございます。」

双葉「いやいや、私がしたいことだからね。楽しいよ。」

せつ菜「それはそうと! 昨日貸した漫画どうでした!」

双葉「めっちゃ面白かった! あのヒロイン最高だったよ! 絵も綺麗  
だし何より話がスポ根でめっちゃ熱くなれるね!」

せつ菜「そうでしょう! 穂花ちゃんも主人公の幼馴染みで、いつも  
主人公が部活に専念できるように影で献身的にサポートをしてるん  
ですよ! 主人公が落ち込んだ時も穂花ちゃんが…」

「  
双葉「ちよ、ちよっとストップ!! ネタバレはやめてね?」

せつ菜「あ、ご、ごめんなさい! また夢中になっちゃって…」

双葉「いいよいいよ。せつ菜ちゃんがキラキラした目で熱く語ってる姿、とっても素敵だから！」

せつ菜「す、素敵って……／＼」ボソツ

双葉「あ、もうすぐ昼休み終わるしそろそろ教室戻らないとね。」

せつ菜「そ、そうですね！」

私、優木せつ菜は同好会の部長さんに恋してしまいました。きっかけは一ヶ月前のあの日、彼女が私を肯定してくれた時からです。

趣味が合う私たちは、この一ヶ月たくさん時間を一緒に過ごしてきました。

一緒にアニメグッズを買いに行ったり、アニメ映画を見に行ったりしました。

彼女の家に遊びに行くこともよくありました。

そうして一緒に時間を過ごすうちに、彼を好きな気持ちはどんどんと膨らんでいきました。

でも……彼女には幼馴染みがあります。

私の大切な仲間である彼女は、双葉さんのことが大好きだという気持ちは溢れています。

その彼女の大好きな気持ちは、邪魔したくない。

でも自分の気持ちは大切にしたい。

その狭間で揺れてしまっているのが現状です。

—————

その日の放課後

双葉「みんなお疲れ様！」

せつ菜「あ、あの双葉さん！今日も良かったらアニメショップに寄って行きませんか？」

双葉「お、いいね！それじゃ…。」

歩夢「せつ菜ちゃん、ごめんね」

歩夢「今日はあなたに話があるからその用事はまた今度にしてもらって良いかな？」

せつ菜「え？あ…は、はい！それじゃあ双葉さん、また今度行きましよう！」

双葉「ごめんね、せつ菜ちゃん。また今度ね！」

せつ菜「はい！」

歩夢「…。」

その日の帰り道

双葉「それで、話ってどうしたの？」

歩夢「…最近、せつ菜ちゃんと凄く仲良いね。」

双葉「趣味が凄く合うんだよ！そんな友達今までいなかったから話

が楽しくてさ！」

歩夢「…… そうなんだ。ごめんね、私はアニメとか漫画とかあまり興味がないから……」

双葉「い、いや！別に謝ることないじゃんそんなの！」

歩夢「私と話しても面白くないよね……」。

双葉「どうしたの歩夢ちゃん！今日ちよつと変だよ？」

歩夢「うう…… ぐすつ……」

裕「ちよ、ちよつと！どっか調子悪いの？大丈夫？」

歩夢「あなたは、私なんかよりせつ菜ちゃんのが好きなんだよね……？」

歩夢「私は、こんなにあなたのことが大好きなのに……」

双葉「そ、そんなことない！歩夢ちゃんのこととは誰よりも大切に

思ってるよ!」

歩夢 「… 本当?」

裕 「本当だよ!」

歩夢 「ずっと、貴女のそばに居ていいの?」

双葉 「もちろん!私もずっと歩夢ちゃんと一緒にいたいよ!」

歩夢 「嬉しい… 大好きだよ、あなた。」ギョツ

双葉 「よしよし… ごめんね、最近構ってあげられなくて…」

歩夢 「ううん、私の方こそ迷惑かけてごめんね…」

双葉 「ううん、歩夢ちゃんが私のこと凄く大切に思ってくれてるんだなって感じて凄く嬉しいよ。これから歩夢ちゃんとの時間をもっともつと増やすね?」

歩夢 「うん!ありがとうあなた♡」

歩夢 「ずっと一緒だよ…?♡」

~~~~~

その日の夜、双葉の部屋にて

双葉「歩夢ちゃんの衣装はこんな感じにしたらどうかかな？」

歩夢「あなたが私のために考えてくれた衣装なら、なんでも嬉しいよ？」

双葉「そう言ってくれれば考えがいがあるよ！」

ピロリン♪

双葉「あ、メールだ…。せつ菜ちゃんからだ！」

歩夢「…。どんな内容？」

双葉「えーとね、漫画の話！ちよつと返信するから待ってね…。えーと…。」

歩夢「ダメ」

歩夢「今は私との時間だよ♡」

歩夢「なんでせつ菜ちゃんのことを考えてるの。」



歩夢「ねえ」

双葉「あ、いや…ごめんね！そうだよね、今は歩夢ちゃんと一緒に居るもんね！ごめんね？返信は後でするね！」

歩夢「ありがとう♡」

――――  
その頃、せつ菜邸

せつ菜「返信、遅いなあ…」

## ヤンデレ彼方ちゃん

ある日

彼方「(お、あなただ〜。今日も抱き枕にしちやお〜。)」

彼方「おーい、あなた…。」

歩夢「あなた、一緒に帰ろ?♡」

あなた「お、歩夢!」

歩夢「今日はちよつと寄り道したいから付き合っただけ  
ど…。」

あなた「おっけー!ついていくよ!」

歩夢「ふふつ、ありがとう♡」

彼方「…。」

また別の日

彼方「あなた〜」

あなた「彼方さん!どうしたの?」

彼方「今日ね、お弁当のおかず作りすぎちゃったからおすそわけし  
ようと思って持ってきたんだ〜」

あなた「ほんと!?!嬉しいよ、ありがとう!」

彼方「ふふ、彼方ちゃんの料理は美味しいよ〜?」

あなた「それはもちろん知ってるよ!」

彼方「そ、それでね、もしよかったら一緒にお昼食べたいなくな  
て…。／＼」

あなた「ごめん、今日は一年生のみんなとミーティングしながら食

べようって話してて… あ、そうだ！彼方さんも来る？」

彼方「… んーん、彼方ちゃんは遠慮しておくよ。ミーティングの邪魔しちゃいけないしね。」

あなた「そつか…。でも、彼方さんとお弁当一緒に食べたいからまた今度誘わせてもらっていいかな？」

彼方「！」

彼方「も、もちろんだよ／＼」

あなた「その時はまた、お弁当作ってきてもらっていいかな？」

彼方「わかつた。その時は彼方ちゃんが腕によりをかけてたーくさん美味しいものを作ってくるよー！」

あなた「やったー！楽しみにしてる！じゃあまたね！」

タツタツタツ…

彼方「あなたは本当にずるいなあ…／＼」

—————

いつの日からか、彼が好きだった。

でも好きになったきっかけはわかる。

あのキラキラした目や笑顔、誰にでも優しく明るく接するあの姿にきつと彼方ちゃんは好きになっちゃったんだよね。

辛い時にいつも支えてくれるあの子のことが大好きになっちゃったんだ。

でもあの子は誰にでも優しいから、常に周りに誰かいる。特に同学年の3人や後輩の3人といつも一緒にいる。

果林ちゃんやエマちゃんも、みんなには言っていないけどあの子のことが大好きなことはわかる。

だって、あの子と一緒にいるときの2人はとーっても可愛い顔してるもんね。

彼方ちゃんだつてあの子と一緒にいたい。一緒にお昼寝したり、一緒に遊んだり、一緒に同じ時間を過ごしたり…

あの子のそばに入り込めない分、その想いはどんどん膨らんでいくばかり。

最近毎日夢にあの子が出てくる。夢の中ではいつもあの子と彼方ちゃんが一緒に居るの。

でも、それは夢の中だけ。起きたら隣にあなたはいない。その事実を知って、いつも泣いちゃうんだ。

それでね、学校に行くと思っちゃうの

「なんであなたは、毎日毎日彼方ちゃんの夢の中に出てきて、夢の中だけでしか優しくしてくれないの?」

つてね。

フェアリーテイルならどんなによかっただろうって、最近ずっと考えちゃうんだ。

—————

ある日の同好会部室

かすみ「せーんばい! 今日一緒に出かけしませんかあ〜?♡」

しずく「ちよつとかすみさん! 先に先輩と遊びに行く約束をしたのは私です!」

歩夢「ねえあなた、今日は御両親がいないんだよね? 晩ご飯作りにいくね♡そのあと、お泊まりしよ?」

かすみ「ちよつと! それ初耳です!」

しづく「先輩、ウチにお泊まりに来ませんか？オフィーリアといーっぱいおもてなし（意味深）しますよ？♡」  
あなた「は、はは… お誘い嬉しいんだけど、俺の身体は一つしかないからさ…」

ワーワー

彼方「はあ… 今日あなたは人気者だなあ。」

愛「お、そうだ！それならウチにご飯食べにおいでよみんな！そのあと4人でぶちよーの部屋にお泊まりするってのはどう？」

あなた「愛ちゃん、それはナイスアイデア！」

かすみ「うーん… 2人きりじゃないけど、まあいいです！2人でいーっぱいイチャイチャしましょうね、せーんぱい♡」

しづく「私は先輩と一緒にいれるならなんでも嬉しいです…」  
／

歩夢「ふふ、お夜食にあなたの大好きな卵焼き作ってあげるね♡」

愛「よーし！じゃあ決まりだー！」

あなた「あ、彼方さんも一緒にどう??」

彼方「え…?」

あなた「せっかくだしどうかかな？」

彼方「あ、部室に参加しないメンバーは彼方ちゃんだけだから、気を遣って…」

彼方「あなたとお泊まり… うん、とっても素敵… だけど」

彼方「あなたが他の女の子と仲良くしてる姿を、学校以外でも見な

いといけないの…?」

彼方「ご、ごめんね。今日は体調が悪いからやめておくれ。ちよつと今日はもう帰るね」

タツタツタツ

パタン

あなた「あ、彼方さん！」

—————

思わず部室から逃げるように帰ってしまった。

みんなきつと変に思っただろうなあ。

でもやつぱり、あの子が他の女の子と一緒に居るのを見るのはもう辛いんだ。

ごめんね… こんな弱い彼方ちゃんて…

とりあえず、私の隠れお昼寝スポットに行こう。それでめいっばい泣いて帰ろう。

じゃないと遥ちゃんに怪しまれちゃうからね。

—————

ここなら誰もこないし、存分に泣けるよね。

彼方「うっ… うっ…」グスツ

あなた「かーなたさん！」

彼方「え、えっ…?」

彼方「な、なんであなたがここに居るのかな〜?」(ぎょしぎょし)

慌てて袖で涙を拭く。

あなた「前彼方さんが俺だけに特別に教えてくれたお気に入りの場所のことを思い出してさ。ここに居るかなって!」

よく見ると、額には汗がびっしより。

走り回って探してくれたんだ…

彼方「ごめんね、彼方ちゃんのために…」

あなた「悩んでる部員がいたら助ける!これも部長の役目だから!」

ああ、やっぱりあなたの笑顔はとっても眩しい。見てるだけで、とっても幸せな気持ちになれる。

彼方「さすが、部長だね〜」

あなた「だろ〜?」

あなた「それでさ、何かあった…?」

彼方「(言えるわけないよ、そんなの…)」

あなた「…そっか、あんまり言いたくないことなのか…。」

この時、とつてもずるいことを考えてしまった。

これを言ってしまうと、あなたの優しさにつけ込むだけになってしまふ。

言ってしまうと、ダメな気がする。

でも… もうこれで最後だから。

彼方「実はね、遙ちゃんと喧嘩しちゃって……」

あなた「えーっ!? 彼方さんが溺愛してる妹さんと喧嘩したの?」

彼方「う、うん……それでどうしても家に帰り辛くて……」

あなた「なるほど……」

あなた「あつ、そうだ!」

あなた「それなら今日ウチに泊まりにおいでよ! あの4人には申し訳ないけど、何か適当に理由つけて断るからさ! 彼方さんも1人でゆっくりしたいだろうし!」

彼方「でも……あなたに迷惑かけちゃうし……」

あなた「大丈夫! 彼方さんがいいなら、是非ウチに泊まってよ! 彼方さんの手料理も食べたいし!」

彼方「じゃあ、お言葉に甘えちゃおうかな?」

あなた「それじゃ決定だね! ちょっと部室に戻って4人に伝えてくるよ。申し訳ないんだけど、部活が終わったらまた連絡するからどこかで時間潰して待つてもらっていいかな?」

彼方「わかったよ。彼方ちゃん、今日はあなたにいっっぱい喜んでもらえるようにたくさんお料理作るね。」



あなた「楽しみにしてる！それじゃまた連絡するね。」

タツタツタツ

彼方「(ごめんね、愛ちゃん、かすみちゃん、しずくちゃん、歩夢ちゃん。)」

少しの申し訳ない気持ちと、あなたと2人きりで一緒に過ごせる大きな喜びに私は浸っていた。

彼方「あ…… 遥ちゃんに連絡しておかないと」

—————

あなた「彼方さんごめん、お待たせー！」

彼方「大丈夫だよ。ぐっすりお昼寝してたから。」

あなた「そっか！夜寝れるかな？」

彼方「ふっふ、今日はあなたといっぱいお喋りしたいから夜更かしするのだよ」

あなた「おお！そういうえばお泊まりの醍醐味といえは夜更かしだもんね！」

あなた「女の子と2人きりでお泊まりなんて、歩夢以外とはしたことないからさ」

彼方「そ、そっか…… / /」

ということは実質彼方ちゃんが初めてなのかな…… 嬉しい / /

あなた「スーパー寄って帰ろっか！彼方さんの料理楽しみだなあ」

彼方「あなたを待ってる間たくさん献立を考えてたんだよ。肉じゃがに生姜焼きに唐揚げに……」

あなた「そ、そんなにたくさん作ってもらえるの？彼方さんに迷惑かかっちゃうし……」

彼方「大丈夫だよ。かなたちちゃんの時短術でサクッと作ってしんぜよう」

あなた「そ、そっか……ならよかった！」

――――  
そのあと2人でスーパーに向かった。とても幸せな時間だった。  
――――

ガチャ

彼方「お邪魔します……」

あなた「いらっしやい彼方さん！着替えてくるから、リビングでちよつと待ってて！」

彼方「はい」

ここがあなたの家……ちよつと緊張しちゃうな／＼

10分後

あなた「お待たせ！」

彼方「おおく私服姿のあなた、ちよつと新鮮かも。」

あなた「確かに、あんまりみんなの前で私服で出たことないもんね……歩夢くらいかな？」

心がズキツと痛む。やはりあなたと歩夢ちゃんの仲はすごく深い。あなたの想い出の側にはいつも歩夢ちゃんがいたのだろう。

彼方「もう時間も遅いし、料理に取りかからないとね」

あなた「あ、俺になんか手伝えることあるかな？」

彼方「それじゃああなたはジャガイモの皮を剥いてくれるかな？」

あなた「わかった！」

彼方「彼方ちゃんはまずはお肉を切って下味をつけるよ」

—————

あなた「なんかさく……」むきむき

彼方「ん？どうしたの？」

あなた「こうやって2人で並びながら料理していると、俺たちきょうだいみたいじゃない？」

彼方「！」

彼方「も、もうあなたいきなり変なこと言って……」／＼

きょうだい……きょうだいなあ。

そうやって言ってくれることはとーっても嬉しいけど

「彼女」とは言ってくれないんだね。

あなた「ごめんごめん！でも、彼方さんみたいなお姉さんがいたらとっっても楽しかっただろうなあ…。」

彼方「… 彼方ちゃんも、あなたみたいなの弟がいたらとーっても楽しかっただろうなって思うよ。」

あなた「ほんと？嬉しいなあ」

あなた「今日だけは俺で良ければ弟になるから、なんか辛いこととか嫌なことあつたらたくさん言っただけ！」

彼方「ありがとう、あなた」

—————

彼方「はい、これで完成だよ。いーっぱい食べてね」

あなた「おお！並べてみると壮観…！」

彼方「もう、大げさだよ。おかわりもあるからたくさん食べて」

あなた「はーい！いただきまーす！」

あなた「あむっ… うん、この唐揚げすごく美味しい!!」

あなた「この肉じゃがも味が染みてとっっても美味しい!!」

あなた「このお味噌汁もすごく優しい味がするよ…！」

彼方「もう、そんなに急いで食べなくても大丈夫だよ。ご飯は逃げないよ。」

あなた「ご、ごめん！美味しくついで…」

彼方「ふふっ。もうちよつとゆっくり食べよう。」

あなた「そ、そうだね！お見苦しいところをお見せしました…」

彼方「いえいえ。作ってる側からすると、とーっても嬉しいんだよ。ほら、これも自信作だから食べて食べて？」

—————

そのあと2人でお片付けをして、2人でテレビを見て、2人でお菓子を食べて…。そしてお風呂に入ると、あつという間に12時を回ってしまった。

あなた「彼方さん、サイズ大丈夫だった？」

彼方「うん、あなたの中学生の時の洋服がぴったりだよ。」

あなた「よかった。布団敷いておいたから、そこに寝てもらっていいかな？」

彼方「ありがとね。」

あなた「それじゃそろそろ電気消すね！彼方さん、眠くない？」

彼方「ちよつとだけ眠いけど、まだ大丈夫だよ。あなたといっぱいお喋りしたいからね。」

あなた「そうだね、いっぱい喋ろうか！」

それからいろんな話をした。

昔のあなたの思い出や彼方ちゃんの思い出、好きなものの話やちよつとした失敗談。そして今度のソロ曲の話やライブの話もした。本当に幸せな時間で、ずっと続いてくれたらいいのについて思ったんだ。

あなた「ふわあく… もう3時だね。」

彼方「そうだねえく…。」

あなた「彼方さんごめん、そろそろ俺やばいかも…。」

彼方「大丈夫だよ。あなたはみんなのサポートもしてたし仕方ないよ。ゆっくりお休みしてほしいな。」

あなた「ありがと… おやすみ…。」

—————

彼方「(寝れない…)。」

お昼寝した分と、好きな人の部屋にいる緊張感で全然寝れる気がしない。

彼方「(羊でも数えようかなあ…)。」

あなた「んんっ…。」もぞもぞ

彼方「(あ、あなたが起きた… トイレかな?)。」

あなた「んんく…。」(ごそごそ)

彼方「(か、彼方ちゃんのお布団に入ってきた!?!/」

あなた「あゆむう… おやすみ…」ギョツ

彼方「(あ…。)」

どうやらあなたは歩夢ちゃんだと勘違いしてるらしい。

こうやってほとんど無意識に入り込んでるってことは、歩夢ちゃんとお泊まりする時はきつといつもこうしてるんだろいな。

本当に仲良しで、本当に私の入り込める隙間なんてないよね。ううん、もう「仲良し」の次元を超えてるのかもしれない。

普通の男女が、いくら幼なじみと言っても毎日一緒にいてお泊まりもしてそういう仲にならないなんてあるのかな…? ?

そう考えると、涙が溢れて止まらなくなっちゃった。

彼方「ひぐっ…。」グスツ

あなた「歩夢…泣いてるの?」

彼方「!」

あなた「大丈夫大丈夫…俺が側にいるから…」なでなで

彼方「(ごめん、あなた、歩夢ちゃん。これで最後にするから…。)」

2人にとって私はただの部活仲間であって、友達。あなたの特別にはなれない。

だからこれで最後にするから…。ね?

彼方「……」ギユウウウ

あなたを強く抱きしめる。これが最後、最後だと思いながら……

あなた「ん…… ふわぁ……」

あなた「…… あれ？彼方さんは？」

机を見ると、丁寧にラッピングされた置き手紙が一つあった。

『あなた、昨日はありがとう。とつても気持ち良さそうに寝てるから起こさずに帰ります。彼方ちゃんは今日ちよつと用事があるから、帰らせてもらうね。あなたと一緒にご飯を食べて、一緒に時間を過ごしてとつても楽しかったよ。それと、いつも彼方ちゃんのわがままに付き合ってくれてありがとう。あなたがいるから、同好会の活動をとつても楽しんできてるんだよ？本当にいつもありがとう。昨日の夜伝えそびれちゃったから、手紙で伝えます。

リビングに朝ごはん作ってあるから、よかつたら食べてね。大好きだよ。 彼方より』

あなた「彼方さん、用事あつたんだ…… あんな遅くまで付き合わせて悪いことしちゃったかな……。」

あなた「こんなに気持ちのこもつた手紙を書いてもらったには、メールじゃなくてちゃんと手紙で返さないとね！月曜日に渡そう！」

最後に、とつても愛情を込めたお料理とお手紙を置いてあなたの家を出た。



この家を出ると同時に、あなたへの叶わない思いも捨てようとした。

でも、結局捨てられなかった。お家に帰って勉強しててもあなたのことばかり思い浮かぶし、涙が止まらなかった。

結局土日とも、何も手につかずただベットで泣くだけだった。

—————

月曜日

あなた「あれ？彼方さん今日は休み？」

愛「なんか体調を崩したって連絡が来たよ」

あなた「そっか…。俺にはなんの連絡も来なかったなあ。」

かすみ「まあまあ先輩、とりあえず練習しましよ！かすみん新しいステップを取り入れでみたんですよ♡」

しずく「あ、かすみさんだけまた抜け駆けしてる！先輩、私も新たな振り付けを入れてみたんです♡チェックしてもらえませんか？もちろん2人きりで…／＼」

あなた「あ、うん…。じゃあ練習場所いこっか！」

あなた「（この手紙…。どうしようかな。お見舞いついでに彼方さんのお家へ持って行くのかな…。？）」



あなた「ほっ……よかったあ。」

あなた「よし、ちよつと気合入れて作曲するかあ！」

—————

次の日

俺はいつものように、歩夢と登校していた。

歩夢「それでね、せつ菜ちゃんが……あれ？」

あなた「あ、彼方さんだ！」

ランチバッグを持った彼方さんが家の近くの公園で座っていた。

あなた「彼方さーん！おはよう！」

彼方「あなた、おはよう♡」ギユツ

あなた「おつとつと！朝から恥ずかしいよ／＼」

あなた「それよりどうしてこんなところに？」

彼方「あなたに朝から会いたくて、ここまで来ちゃったよ♡」

あなた「そ、そうなの？彼方さんの家うちから近くないのにわざわざ  
ぎゅ……」

彼方「ううん、こんなの当然だよ♡」

彼方「それと彼方ちゃん、これから毎日あなたにお弁当作るね♡」

あなた「え、でも」

彼方「でもじゃないよ、彼方ちゃんが作りたいから作るんだよ。」

あなたに喜んでもらえたらそれでいいの♡」

あなた「そっか、ならお言葉に甘えて…」

歩夢「彼方さん、おはようございます」

彼方「歩夢ちゃん、おはよう」ギョツ

歩夢「わあっ！も、もう恥ずかしいですよ…」／／

あなた「そろそろ行こっか？」

彼方「そうだねえ」。ギョツ

あなた「あ…えーと、その、彼方さん？」

彼方「ん？♡」ギョウウウ

あなた「(あいてて…ちよつと強いな…)」

あなた「な、なんでもないよ！歩夢もほら、いこ？」

歩夢「…うんっ♡」ギョウウウ

あなた「(はは、両手に花ってやつ…かな?)」

—————

あなた「(ふう…道中変な目でたくさん見られながらようやく着いた…)」

かすみ「せんぱーい!♡」

あなた「あ、かすみちゃん!おはよう!」

かすみ「朝から先輩に出会えるなんてラッキーですう♡」すりすり  
あなた「あ、あはは...」

かすみ「はっ!そうだ、かすみん1時間目から小テストがあるんだ  
だった!また放課後会いましょうね、先輩!♡」

タツタツタツ

歩夢「嵐のようってきて、嵐のように去っていったね...」

あなた「かすみちゃんらしい...」

彼方「なんでみんなあなたとの2人きりの時間を邪魔するの...」ぼ  
そっ

あなた「彼方さん?何か言った?」

彼方「ううん、何も言っていないよぉ?♡」

彼方「それより、そろそろ彼方ちゃんも教室に行かなきゃ。またお  
昼に会いに行くね?♡」

あなた「うん!」

歩夢「...?」

キーンコーンカーンコーン

あなた「ふわあく、やっとお昼休みだよおく」

彼方「あなたく」

あなた「彼方さーん！」

彼方「お弁当持ってきたよ。部室で一緒に食べよ？」

歩夢「あ、私今日お弁当ないんだった… 今日他は他の友達と食堂でお昼食べるね？」

あなた「そっか、そういえば今日は学食の日だった…」

彼方「歩夢ちゃんごめんねえ。それを知らなかったから、あなたの分のお弁当しか持ってきてなくて…」

歩夢「いえ、大丈夫ですよ！それに…」

あなた「それに？」

歩夢「… ううん、何でもない！じゃあまたあとでね！」

—————

部室にて

彼方「じゃじゃくん」

あなた「おおく！お味噌汁までついてる！」

彼方「お家に保温できるお弁当箱があったから持ってきたんだく。」

どうぞ、召し上がれ〜?」

あなた「何から何まで本当ありがとう!じゃ、お言葉に甘えていた  
だきまーす!」

あなた「まずはこのひじきから…」ぱくっ

あなた「(… あれ、なんかちよつとだけ変な食感が混じって  
る…)」

彼方「♡」ニコニコ

彼方「どう、美味しい?♡」

あなた「あ、うん!とっても美味しいよ!」

彼方「このオムライスも自信作なんだ、食べて〜?♡」

あなた「うん!」ぱくっ

あなた「(… あれ、まただ。ケチャップに何か変な風味が混じって  
るな…)」

彼方「おいしい?♡」

あなた「う、うん。美味しいよ!」

彼方「ふふっ、そんなに喜んでもらえるとお彼方ちゃんも頑張って  
作った甲斐があるよ♡」

彼方「彼方ちゃんの料理で元気つけて、午後も頑張ろ〜!」

放課後

あなた「みんな今日も張り切っていいこうね！」

かすみ「先輩！今日はかすみんのサポートについてくれるんですよ？♡」

あなた「うん！約束だからね！」

かすみ「やった〜！」ぴよんぴよん

あなた「他のみんなはプラン通りに練習してね！それじゃかすみちゃん、いこつか？」

かすみ「はい」♡

彼方「あなた♡」ギョツ

あなた「か、彼方さん？どうしたの？」

彼方「今日はわたしのサポートについてほしいなあ。あなたと一緒にやりたいことたくさんあるの♡」

あなた「え、いやでも、かすみちゃんとは前から約束してたし…」  
かすみ「そ、そうですよ！やっとかすみんの番が回ってきたんですから！彼方先輩はまた今度にしてください！」

彼方「えく…嫌だよお。」

あなた「こ、困ったな…」



かすみ「彼方先輩！せんぱいが困ってますし、もう駄々こねるのやめてください！」

彼方「…るさいなあ」

かすみ「え、なんて言いました？」

彼方「うるさいなあって言ってるの!!」

彼方「ねえ、かすみちゃんがそうやってあなたにくつついてあなたに一番迷惑かけてるの、わかってる?」

彼方「あなた、いっつも困惑してるよ?」

彼方「あなたのことが好きなら、もう少しあなたのこと考えて行動しようね。」

彼方「あと、そのぶりっ子キャラいつまでする気なの?正直うざ…。」

あなた「彼方さん!!!」

シーーン…

あなた「それ以上言ったら、怒るよ」

かすみ「うっ…えぐっ…」グスツ

かすみ「うわあああーん!!!」

しずく「かすみさん、大丈夫!？」なでなで

璃奈「かすみちゃん、ちよつと保健室に行こう。璃奈ちゃんボード『ハラハラ』」

せつ菜「彼方さん、今のはなんですか!？」

愛「かなちゃん、今のはちーつと見過ごせなかったかな。」

彼方「……彼方ちゃんは思ったことを言っただけだよ。」

エマ「それでも、あんなこと言うなんて酷いよ……。」

果林「もしかして、まだ体調治ってない……とかじゃないわよね?」

彼方「うん、彼方ちゃんは元気まんまんだよ。」

あなた「……彼方さん、ちよつと来てくれるかな。一年生の二人と歩夢はかすみちゃんをお願い。他のメンバーはちよつと部室で待っててもらっていいかな?」

あなた「行くよ、彼方さん」グイッ

彼方「あつ……♡」

~~~~~  
彼方さんの手を引き、他の人には聞かれない人気のない場所に来た。

あなた「ここなら誰も来ないね…。」

彼方「ふふつ、あなたつてば情熱的なんだから♡初めてのキスがここでなんて彼方ちゃんびつくりだよ。」

あなた「ふざけるのはもうやめてくれないかな?。」

彼方「ふざけるって…ふざけてなんかないよ。彼方ちゃんは真剣だよ?。」

あなた「じゃあなんでかすみちゃんにあんなこと言ったんだよ!。」

彼方「なんでって、あなたが迷惑してると思ったから…。」

あなた「迷惑なんてしてない!確かにいつもグイグイくるから照れるけど、かすみちゃんが懐いてくれてるのは嬉しい!。」

彼方「ふーん…。」

あなた「ちやんとかすみちゃんに謝らないと、俺許さないから。」

彼方「な、なんでかすみちゃんの味方ばかりするの?。」

あなた「味方とかそんなじゃなくて、あれだけ酷いこと言ってるんだよ!!ちゃんと自覚して!!。」

彼方「…グスツ」ポロポロ

彼方「あなたのバカ…!。」

あなた「か、彼方さん…ごめん、ちよつと強く言いすぎたか

も……」

彼方「彼方ちゃんはただ……」

彼方「あなたの彼女として、あなたに尽くそうと思って……」ポロ  
ポロ

あなた「……は？」

彼方「だって、お手紙に書いてくれたじゃん!!!」

彼方「『おれも彼方さんのこと、愛してるよ!結婚しよう!』って!」

あなた「ち、ちがう!俺はそんなこと書いてない!!」

あなた「俺が書いたのは、『彼方さんみたいな素敵な人と結婚する人は幸せだろうな』」

あなた「『俺も彼方さんのこと大好きだよ!これからもたくさんサポートさせてね!』」

あなた「この二つだったはず……!」

彼方「知らない知らない!彼方ちゃんそんなの知らない!!!言ってくれたもん、好きって!愛してるって!結婚しようって!」

彼方「お弁当もね、痛かったけど頑張って作ったんだよ……?」

あなた「痛かった……?え?」

彼方「ふふっ、気付かなかった？ひじきとオムライスは自信作だったんだ〜…♡」

彼方「彼方ちゃんの愛情を込めたからね♡」

あなた「ま、まさかっ… うっ!!」

あなた「げほっ、げほっ!!!」

彼方「ああ…なんで吐いちゃったの？彼方ちゃんのお料理美味しくなかった？ごめんね、次はもつと美味しく、愛情を込めて作るからね…ごめんね、ごめんね…」

あなた「か、彼方さん… ちょっとおかしいよ…」

彼方「な、なんで？彼方ちゃんはただあなたのために…」

あなた「それ、もう迷惑だからやめてくれ！」

彼方「!」

彼方「や、やだよ…捨てないで、お願い…彼方ちゃんあなたのためならなんでもするから！」

彼方「あなたが言うなら、どんな衣装だって着るよ？えっちなこともしたいならたくさんしてあげる。お腹が空いた時はいつでもお料理作ってあげるし、寂しい時はずっと側にいるよっ。」

彼方「だからお願い、彼方ちゃんのこと捨てないで・・・あなたに捨てられたら、もうどうしていいかわからないよ・・・」ポロポロ

あなた「そ、そんなこと言われたって・・・！」

彼方「んっ・・・」チュッ

彼方「あむ・・・れろっ・・・んちゅっ・・・♡」

あなた「!」

あなた「や、やめてくれ!」ドンッ

彼方「きゃっ!!」

あなた「はあっ、はあっ・・・ 彼方さん、落ち着くまで同好会には来ないでくれ・・・。」

彼方「え・・・？」

あなた「これは、部長命令です」

あなた「彼方さんに来られると、今日みたいなことがまた起きるかもしれない・・・。」

あなた「頭が冷えるまで、同好会の参加は禁止させてもらおうよ・・・。」

彼方「やだ・・・ やだよ・・・。」

あなた「それが嫌なら、俺との接し方をちゃんと考えてくれ・・・！」

あなた「こんな彼方さん、嫌いだよ！」  
タツタツタツ

彼方「やだ… 行かないで、あなた… ううつ」ポロポロ

彼方「嫌い… 嫌い… こんな彼方ちゃんはダメなんだね… あなたの理想のお嫁さんになれない…」ブツブツ

彼方「お料理の勉強ももっとしなくちゃ… かわいいお洋服も着て、お勉強もたくさんしてあなたにふさわしい女の子にならなきゃ…」ブツブツ

ガララツ

あなた「ふう…」

せつ菜「あなた！どうでしたか？

あなた「う、うん。やっぱり彼方さん体調が悪かったみたい。結構勉強だったり同好会だったりりで負担が大きかったみたいで…」

あなた「とりあえず一旦落ち着くまで彼方さんには同好会に無理してこなくていいって言ったよ。」

愛「そっか…」

エマ「彼方ちゃん、知らず知らずのうちに無理してたんだね」

果林「とりあえず私たちにできることは、あの子が帰ってきてきやすいような雰囲気で部活をしていくことね。」

あなた「うん… あとでミーティング開こうか。」

あつたんだ。――  
あのあとミーティングをし、かすみちゃんのケアをしながら今後の方針を伝えた。

みんな納得してくれてよかったけど、やはり歩夢にだけは伝えようと思いい家に呼んだ。

あなた「・・・と、こんなことがあつたんだ。」

歩夢「そんなことがあつたんだね・・・辛かったね、あなた。」ギョツ

あなた「ありがと、歩夢・・・」

歩夢「もし彼方さんに何かされた時は、絶対に私が守るからね。」

あなた「女の子に守ってもらおう・・・か。ちよつと情けないなあ。」

あなた「できれば、二人で支え合って困難を乗り越えていきたい・・・的な。」

歩夢「そ、それってもしかして・・・／＼」

あなた「あつ・・・いや！そういうわけじゃなくてさ、そのほら、俺たち昔からずっと一緒にいろいろ頑張ってきたからさ、これからも頑張つて行こう！的な？」

歩夢「もう・・・はっきり言つてほしいよ／＼」ぷくーっ

あなた「あ、歩夢・・・こんな俺でいいの？」

歩夢「あなた以外は嫌。」



歩夢 「あなたが、いいの。」

あなた 「歩夢…。」

あなた 「その、こんなに情けない俺だけ…。これからも未長く…。  
お願いします」

歩夢 「…。ふふっ、今はこれで許してあげる♡」

あなた 「あはは…。手厳しいな…。」

—————

あれから一週間が過ぎた。あれ以来彼方さんからの連絡は一切なく、あの日からは平和な毎日だ。一応先生から聞いた話によると、欠席の連絡は毎日来てるらしく安否は確認できている。

そして、帰り道のことだった。

あなた 「いやー、果林さんが色々裏で手回してくれてさ。イベントがうまくいったんだよ！」

歩夢 「そうなんだ、流石果林さんだね！」

トントン

あなた 「ん？」くるっ

彼方 「あなた…。久しぶり♡」ニコッ

あなた「彼方…さん？」

そこには前とは雰囲気少し変わった彼方さんが立っていた。

彼方「彼方ちゃんね、あれからずーつとおうちにこもってメイクの勉強やお料理の勉強してたんだあ。」

彼方「あなたが好きな色のネイルにね、リップも淡いピンクにしてみたんだよ。お洋服もね、果林ちゃんみたいに少し露出が多めのお洋服を買ったんだ。」

彼方「あなたに喜んでもらえるかな… って♡」

あなた「！」ギリッ

あなた「違う、違うんだよ彼方さん… 俺はそういうことが言いたいんじゃないかったんだ」

彼方「これでも違うの…？ごめんね、彼方ちゃんもつと頑張らないとね。それじゃ明日は果林ちゃんにファッション教えてもらって、かすみちゃんに可愛くなるメイクを教えてもらって…」ブツブツ

歩夢「っ!!!」ギリッ

歩夢「この子は絶対渡さない… もうこの子に付き纏うのはやめてください!!」

歩夢「私たち、付き合ってるんです!!!」

彼方「…は？」

歩夢「だからっ、あなたと私はもう付き合ってるんです!!あなたは  
彼方さんのものじゃない!!!」

彼方「嘘だよ」

彼方「ねえ、嘘だよね?あなた？」

あなた「嘘じゃ…ない…よ」

あなた「歩夢は、昔からずっと一緒にいて…辛い時も楽しい時も  
共有して…」

あなた「これからもそばにいて欲しいって、そう思ったんだ。」

あなた「だからごめん、もう彼方さんとは付き合えない…。」

彼方「…」

彼方「…ごめんね、あなた、歩夢ちゃん。本当は気づいてたんだ。  
彼方ちゃんの恋は叶わないって…」

彼方「それなのにあなたにつきまとして…あなたや同好会のみんなに  
迷惑かけて…ごめんねえ…」ぽろぽろ

あなた「か、彼方さん!気づいてくれたんだね!」

歩夢 「あなた、近づいちゃダメー！ーッ！！！！」

あなた 「え…」グサツ

彼方 『『ここ』は彼方ちゃんの望む世界じゃないから、一緒に死んで二人だけの世界に行こ…？♡』

グサツ

歩夢 「い、いやー！ーっ！！！！」

歩夢 「あなた、返事して！！あなた！！」ゆゆさ

歩夢 「か、彼方さんも！！返事をして！！！！」

彼方 「(あなた…一緒に、おとぎ話の世界へ…いこうね…)」

1ヶ月後 病室

彼方「……」

ガララッ

果林「はい。彼方、元気にしてた？」

エマ「彼方ちゃん！来たよ」

彼方「二人ともおっいつもありがとね」

果林「今日は何をしてたの？退屈でしょ？」

彼方「今日はねえ、遥ちゃんが来てくれたからずーっとお話ししてたよ」

エマ「そうなんだ！あ、お菓子持ってきたよ！これはね、お台場にあるとっても美味しい洋菓子店のお菓子なんだよ！」

彼方「ありがとう。早速いただくねえ。」

彼方「あむっ……うん、とっても美味しい。」

果林「それならよかったわ。」

果林「ところで……何か思い出した？」

彼方「うくん……遥ちゃんに手伝ってもらったけど、あんまり深く思い出せないや」

エマ「そ、そっか……。その方がいいのかもね」ボソツ

果林「そう…。」

彼方「彼方ちゃん、とーっても大事なことを忘れてる気がするんだ。」

果林「無理して思い出さなくていいの。今はゆっくり休みなさい。そして学校に来たら、また一緒に遊ぶわよ?」

彼方「もちろんだよ。本当にありがとうね、2人とも。」

エマ「ううん、彼方ちゃんは大切な友達だもん!」

果林「それじゃ、帰るわね?」

エマ「またね、彼方ちゃん!」

彼方「うん、二人ともまたねえ。」

ピシヤン

果林「… さてと、もう一つの病院に行きましようか。」

エマ「うん、そうだね…。」

—————

ガララッ

果林「こんばんは、歩夢、あなた。」

エマ「こんばんは、2人とも。」

歩夢「果林さん、エマさん、こんばんは」ニコニコ

そこには髪の毛もボサボサで隈だらけの歩夢と、寝たきりのあなたがいる。

歩夢「ふふっ、あなた。エマさんと果林さんが来てくれたよ？」  
ギョツ

1ヶ月前のある事件で、彼方とあなたは大きな怪我を負った。

彼方は傷ついたところが運良く急所を外れ、出血も多くはなかったが記憶障害が少し出ている。まだ5人の時代のスクールアイドル同好会のことしか覚えてないらしい。

あなたは刺された部分が悪かったみたいで、出血多量によって死の淵を彷徨ってしまった。幸い命は助かったが、まだ目を覚さない状態である。

歩夢「この子ね、今日もずっとお寝坊さんなんです。でもたまに目を開けては『歩夢、治ったらいっぱい遊びに行こうね。どこに行きたい？』って…。」ニコニコ

歩夢はこの事件以来、付きつきりでこの子のそばにいらしい。ずっと笑顔でこの子の身体のお世話をしているらしい。同好会や学校にも姿を現さない。現実を受け入れられず、精神が壊れるギリギリのラインをあなたの存在が繋いでいる。

もし、このまま目を覚さないなんてことがあれば…。どうなるかわからないだろう。

エマ「お菓子買ってきたから、二人で食べてね！」

歩夢「わあっ、ありがとうございます。美味しそうだね、あなた」ニ

ニコニコ

あなた「……」

果林「歩夢も、たまには学校に顔を出してね？みんなとっても喜ぶと思うわ。」

歩夢「はい！ありがとうございます」ニコニコ

果林「それじゃ、私たちはそろそろ帰るわね。」

ピシヤン

エマ「ねえ果林ちゃん、歩夢ちゃんほとんど寝てないだろうし、身体が心配だよ……」ひそひそ

果林「そうね……あの子が目を覚まして戻ってきて辛い思いをしないように、彼方と歩夢のケアもちゃんとしないとね……」

ふふっ、もうあなたってばく

果林「また、起きないあの子と喋ってるわね……」

歩夢『ほら、2人が美味しそうなお菓子を買ってきてくれたよ？あーんしてあげるね♡』

歩夢『あくん……もう、ちゃんとお口開けないと食べられないよ♡』グイグイ

歩夢『もう、また口元にこんなにこぼしてる。しょうがない人なん



だから♡』

歩夢『あむっ、はむっ…♡』

歩夢「あなたの食べこぼしを食べるのも、彼女の役目だよね♡』

エマ「っ!!」

エマ「か、果林ちゃん…。」

果林「ええ、本当にまずいかもね…。」

――――

果林「あ、雨降ってるわね…。」

エマ「私、折りたたみ二つ持ってるよ。」

果林「あら、ありがとうエマ。」

あんなに明るかった同好会も今や影を潜め陰鬱な空気に包まれて  
いる。

一応あなたの代わりとして私がある程度仕切ってはいるが、あの子  
の代わりになんて到底なれるわけではない。

それでもみんな、心の内はあの子の帰りを待って、帰ってきたとき  
に成長した姿を見てもらいたいという気持ちがあるからまだ同好会  
として成り立っている。

ねえ、あなた。私はどうすればいいのかしら？

あなたがいない同好会は、あまりにも脆いのよ。

果林「早く、帰ってきて……」

そう空を見上げ眩いたが、曇天の空に虹はかかりそうになかった。